

## 詩と暴力

# 萩原朔太郎の表象空間

## —— その百年

コメント: 田中純(東京大学)

「かくの如く、古代から人間は戦争して来た。夢魘のやうに、狂気のやうに、動物のやうに戦つて来た。…だがそれらの戦術の上位に於て、さらにまた一つの、不思議な共通した戦術があつた。それはメタフィジカルな戦術であり、常識を超越して、本能の神経だけが知り得るところの、或る種の精神錯乱的な原理である。我々はそれを知つてゐる。だが動物の舌が言へないやうに、永久に言ふことが出来ないのである。」(「戦術の神秘」『絶望の逃走』1935年)

## ゲオルク・トラークル Georg Trakl(1887-1914)

「青い獣の頭は死を恐れて項垂れがちとなり」(「変容」)

「青い獣が／野いばらの藪でそっと血を流している。」  
(「エーリス」)

「青い瞬間こそはまさしく魂に近いもの」(「幼年時代」、連作「夢の中のセバステイアン」より)

いずれも『トラークル詩集』(瀧田夏樹編訳、小沢書店)より。

## 「影」につきまとわれた「光」

「青ざめた玻璃(はり)天井の光線が、いつも悲しげに漂つてゐた。…そして腐った海水だけが、埃つぼい日ざしの中で、いつも硝子まどの槽(をけ)にたまつてゐた。…曇つた埃つぼい硝子の中で、藍色の透き通つた潮水と、なよなよした海藻とが動いてゐた。」(「死なない蝸」『宿命』昭和14=1939年)

## 「近代日本」の時間性

「そんな「冷たい時間」ないし「死んだ時間」の貯留槽の中に呑み込まれ、「蝸」は消滅した。しかしそれは、——欠如としての「熱い時間」はまだそこに滞留しつづけている。そこにあるのは「冷たい時間」と「熱い時間」の共犯関係の、シニカルにして絶望的な、最悪の類落形態と言ふべきものだ。」

「漂泊」とは畢竟、「飢餓」として、「或る物すごい欠乏と不満」それ自体としてこの世に生きることの別名にほかならない。」

「日本への回帰」という一句に含まれる「日本」とは結局、あの「死なない蝸」の棲む水槽——「埃つぼい日ざし」が射しこみ、「腐つた海水だけ」が溜まつたあの冷たい水槽のような何ものかのことなのである。」

いずれも松浦寿輝『明治の表象空間』より。

## パサージュの光

「早く登場しすぎたガラス、早すぎた鉄。きわめて脆い材料ときわめて強力な材料とがパサージュにおいて打ちのめされ、いわば陵辱された。前世紀半ばには、ガラスや鉄による建築はどのようにしたらいいのか分かっていなかった。だからこそ、鉄の柱のあいだのガスをとおしてさしてくる日中の光はあれほど汚く、かすんでいるのだ。」(ベンヤミン『パサージュ論』断片F1,2)

「パサージュを支配している光について。「あらわな脚の上にかくしあげられるスカートの下の突然の輝きにも似た、どことなく深海を思わせる、海緑色の微光。…あの人間水族館の数々…」ルイ・アラゴン『パリの農夫』(同、断片R2,1)

## パサージュの光(続)

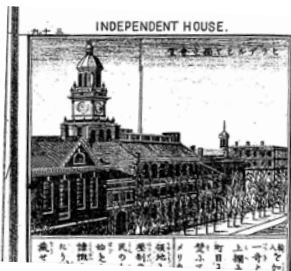
「フロイトが個人意識のもつ性的な意識内容について主張したのと同様に、ある集団の抑圧された経済的な意識内容から一つの作品なり想像的なイメージなりが生じてくることがありうるとすれば、われわれはこの[ゲルシュテッカー『沈める都市』の]叙述のうちに…パサージュの完全に昇華された姿を眼のあたりにしていることになるだろう。すずらん街灯の冷たく光る電球、申し分なく華麗で堂々たるガス灯の照明でさえ、ゲルシュテッカーのこの海中の世界に入り込んでいるのだ。」(同、断片R2,2)



鐘之臺計時

圖之街市

『定本 青猫』(昭和11=1936年)より



『世界旅行万国名所図絵』(明治18=1885年)より



『特命全權大使米歐回覧実記』  
(明治11=1878年)より

『輿地誌略』(明治13=1880年)より

現地のガイドブックなどの挿絵版画の復刻か？



→ 寓意的類型化



## 類型化した風景の情動喚起

- ・「情念定型」(アビ・ヴァールブルク)あるいは「シミュラクル」(ピエール・クロソフスキー)としての風景

「シミュラクルがファンタズムの拘束力を効果的に模するのは、ステレオタイプ化した図式を誇張してみせることによるのみである。ステレオタイプをことさら大袈裟になぞりそれを強調してみせること、それは、ステレオタイプがその写しをなしているところの妄執をくつきり際立たせることなのだ。」(クロソフスキー『ルサンブラン』より)

→ステレオタイプの西洋への憧憬という「ファンタズム」の強化＝文明開化への「郷愁(のすたるぢや)」

## 吉増剛造「靈魂のかたち」

- 筑摩書房版『萩原朔太郎全集』第三巻付録「研究ノート」(1977年5月)所収。
- 引用は、吉増剛造『コジキの思想』(慶應義塾大学出版会、2016年)、267-275頁による。「…」は省略を表わす。
- 朔太郎の詩のもたらす「詩的体験」とは何か？

「そのオレンジ色にやや薄墨色のまざった円光とともに歩くという体験をした。…読後の印象が淡いひかりの渦になってわたしの歩行をつつむようについてくる(幻視とも錯乱ともちがう)奇妙な現実感のある現象…(詩篇を横糸とすると)朔太郎のもつ靈魂の経糸のような構造線が感知されて(朔太郎は「横笛の音」というが)ある全体が感じられはじめてきたことによっているのだろう。奇怪なことである。」

「[朔太郎の詩の]その核心、彼はそれを「靈魂ののすたるぢや」といい「春の夜に聴く横笛のひびき」といったが、わたしたち後年の読者にはむしろ無音の核心、あるいは無意識の冴えといったような現象と受けとれる。…[淡いひかりの渦]それを靈魂のかたちといおうか、朔太郎の詩篇群が読後に残す気配、そのなかに(わたしなりに)彼のいう「のすたるぢや」の漂うのをみたとおもう。…その「無」というところで感知していたのは靈魂のかすかな狂いといつか隙間のようなものであった。…そのズレのところに生じてくる凝縮と浮遊の同時運動、おそらくそれが淡いオレンジと薄墨のいりまじったひかりの渦を生み、読後、読み手の足もとに漂いはじめるのだ。」

「靈魂のかたちが路次に浮かんできた。久しぶりに朔太郎の詩篇群を読みかえして、説明のむつかしい気分が襲われ…朔太郎の詩篇群(とくに『月に吠える』あたり)を読んで珈琲店の扉をおして歩きだすと、じつに不思議な気分が襲われ…めまいのする状態のまま歩行していて、もしわたしに宗教的な体験があったならうまく説明できるような気もするのだが、寂滅と歓喜のはざまを、柔らかいオレンジ色のひかりのなかを、歩いてゆくような状態が襲ってきたのだった。…神秘的な柔かさが読み手をおしつづむ、そんな現象が朔太郎の詩篇群の読後にやってくるのだ。」

「読み終ると、あるいは読むのをやめて歩きだすとそこに不思議なズレが生ずる。そこではじめて朔太郎の「横笛」がなりだすのだ。とすると、詩篇群は朔太郎のもっていた靈魂に感応するための通路といつか、通過点のような位置に立つものと(わたしの経験したこの場合には)いえそうだ。…読むのをやめて歩きだすと追ってくるあの淡い光の渦(なにか沖か浦…打ち寄せている波のように追ってくるもの)には微妙な次元のズレがある。…不思議なバランスである。そしていまわたしは、「詩的体験とは何か」ということの問題にしているようである。」





- 次のスライドの青猫を、スライドが自動的に切り替わるまで(30秒間)見つめてください。
- スライドが切り替わったら、白紙のスライドを見つめ続けてください。



## 補色的「経験」

「むしろ彼[ベルクソン]は、経験の歴史的な規定をすべて斥ける。こうすることで彼はとりわけ、そして本質的に、ある経験に肉薄するのを避けることになるのだが、じつはこの経験から彼の哲学が生じてきたのであり、あるいはむしろ、この経験に対抗するために彼の哲学が要請されたのである。その経験とはすなわち大工業時代の不毛で眩惑的な経験である。この経験に対して閉ざされる目には、この経験の自然発生的な残像として、補色的性格をもつ経験が現われる。ベルクソンの哲学は、この残像を詳述し定着しようとする試みである。」ペンヤミン「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」(久保哲司訳)より。

→ 朔太郎の「経験」という問題系へ